平成１３・１４年度

帰国・外国人児童生徒と共に進める教育の国際化推進地域最終報告書

栃木県足利市

１　帰国・外国人児童生徒と共に進める教育の国際化推進地の概要

①　推進地域内の関係の児童生徒数（小学生8,８６４名、中学生4,６５４名、合計１3,５１８名）

本市では、この「帰国・外国人児童生徒と共に進める教育の国際化推進事業」を進めるに当たって、本市の状況を踏まえ、外国人児童生徒への指導の在り方に視点を当てて取り組んできた。

本市の外国人児童生徒の在籍状況については、全在籍数１３，５１８名に対して１３０名が外国人児童生徒であるので、およそ１％に当たる。

市内小学校２２校、中学校１１校、合計で３３校のうち、２２校に外国人児童生徒が在籍していることになる。したがって、一部の学校だけでなく、市内全域に在籍校が広がっており、外国人児童生徒に対する多面的な指導・援助は全市的に取り組んでいく必要があることが分かる。

市内に在籍する外国人児童生徒の国籍については、ブラジル、ペルーの南米出身者が多く、次に韓国、フィリピンとなっている。

②　推進地域の特色

本市においては、米国スプリングフィールド市に中学生訪米団派遣事業、英語スピーチコンテスト優秀者派遣事業をはじめ、青少年交流訪中団、市民訪中団、経済訪中団、代表友好訪中団の派遣事業を行っている。逆に、スプリングフィールド市からの青少年訪日団、薬剤師訪日団、ジャズ訪日団受入事業、及び中国済寧市からの訪日団を受け入れている。

また、市内の中学校には８名のＡＬＴが英語指導支援に当たり、生きた英会話の習得や英語の楽しさに触れられるように努めている。さらに、市内在住の外国人ボランティアをお願いして、「総合的な学習の時間」における小学校英語活動についても充実するよう国際交流協会等の協力をいただいている。

③　帰国・外国人児童生徒の実態

市内の小中学校に在籍している外国人児童生徒の数は、平成５年には８６名だったものが、現在では１３０名と、年々微増傾向にあり、ここ３年間は約１２０名の子供が在籍している。また、日本語指導を必要とする外国人児童生徒の数も７１名に達している。

長期の滞在によって日常の会話（生活日本語）には不自由さが少なくなってきても、学習指導や適応指導を考慮すると、外国人児童生徒には日本語指導（学習日本語）を継続して行っていくことが必要となっている。

さらに、言葉の壁が原因と思われる学校不適応を起こして、不登校になってしまう心配もあるので、不安や悩みを聞けるようなカウンセリングも必要である。日本

語指導とカウンセリングを組み合わせて指導に当たることが大切であると考える。
　また、中学校卒業者については、進学を希望する者も増えているので、進路指導も含めた入学試験に向けた補習指導も必要となっている。

２　帰国・外国人児童生徒と共に進める教育の国際化推進地域センター校の概要

①　学校名　　栃木県足利市立山辺小学校
　校長名　　石　川　博　右
　所在地　　栃木県足利市八幡町３８６
　学校規模　　児童数６９４人　　２１学級
　電話番号　　０２８４－７１－１２８８
　ＦＡＸ番号　　０２８４－７１－１２８９
　交　通　　東武伊勢崎線足利市駅　徒歩１０分
　ＨＰアドレス　　http://www.city.ashikaga.tochigi.jp/kyouiku/yamabe/index.html

②　センター校への通級児童生徒数

　本市では公共交通機関の利用が困難のため、他の学校からセンター校へ通級している外国人児童はいない。外国人児童生徒の在籍する学校が市内各地に散在しており、センター校には２３名の外国籍の児童生徒が就学しており、そのうち１４名が日本語指導が必要な子供であり、足利市内でも最も多い数となっている。

ペルー　（スペイン語）	６名	合　計　１４名
ブラジル（ポルトガル語）	６名	
韓国　（ハングル語）	１名	
フィリピン（タガログ語）	１名	

③　推進地域の特色

　センター校の山辺小学校は、創立１２０年を超える学校である。足利市の中心より南に位置し、周辺は住宅地が広がっている一方、大型の店舗やスーパーなどの商業施設も多い。また、市内の南にある工業団地や近隣市町村の工業団地にも近い。私鉄の駅も近く、アパートやマンションなども見られ、企業の社宅もある。
　このような状況から、外国から働きにきた人たちが居住しやすい環境が整っていると思われる。そのため、本校や隣接学校に入学してくる外国人児童生徒の数が多いのではないかと思われる。

④　センター校での指導時間及び指導内容

指導時間　　担当教員４１時間　外国人子女教育専門指導員３時間
指導内容
ア　日本語指導
　授業で使われる言葉や日常の学校生活で使う言葉などの基本的な日本語指導
イ　学習適応指導
　教科書に出てくる言葉や、テストで使われる言葉、教師の使う言葉、未学習内容の補習など学習への適応の手助け

ウ　生活適応指導

学校行事や学校の決まりなど学校生活への適応の手助け

エ　日本の文化や伝統に親しませる指導

季節の行事や風俗習慣を教え、日本文化への理解を図る

⑤　センター校を中心とする帰国・外国人児童生徒指導協力体制について

外国人児童がいる近隣の学校に日本語教室の授業を公開したり、情報交換をして協力している。担当教員が相互に学校訪問をしたり、資料の交換をしたりしている。

センター校以外の外国人児童生徒の在籍校については、本事業における日本語指導講師と外国人児童生徒教育カウンセラー及び足利市外国人児童生徒教育専門指導員が巡回訪問指導を行っている。

３　帰国・外国人児童生徒と共に進める教育の国際化推体制について

①　教育国際化推進連絡協議会の概要

ア　構成員　小中学校長会代表、日本語指導講師、外国人保護者等、１６名

イ　活動状況

・　市内小中学校への巡回訪問指導のための計画づくり　４月
・　学校教育課職員による外国人児童生徒在籍校訪問
・　巡回訪問指導の学期末反省会（分科会）の開催　７，１２，３月（３回）
・　教育国際化推進連絡協議会（全体会）を開催　２月（１回）

ウ　協議会設置の効果

学校の中だけでなく、家庭生活の様子など、今まで以上に細部に渡って情報交換ができた。さらに、日本語指導だけでなく総合的な学習の時間における国際理解教育の実践状況についても報告された。国際交流協会や地域の外国人保護者の活用など、教育の国際化の推進に当たって、様々な支援態勢が発案された。

②　加配教員の活用状況

２名の加配教員が週４１時間（教員一人あたり２０時間程度）の指導を行っている。外国人児童が日本語教室へ通級する個別指導のほか、加配教員が普通学級へ出向いて担任とＴＴ（加配教員が外国人児童を中心に支援）による指導も行っている。

③　教育相談員等の派遣状況及びその効果

ア　日本語指導講師

日本語指導講師はスペイン語が堪能で、足利市外国人児童生徒教育専門指導員も兼任している。今年度は、センター校を含め市内８校（小学校３校、中学校５校）に、市の事業も含めて週に５日間訪問し、取り出し指導による日本語指導やスペイン語による教育相談等を担当している。

イ　外国人児童生徒教育カウンセラー

心理学専攻のカウンセラーは、センター校以外の４校（小学校２校、中学校２校）に週３日間訪問し、母語（スペイン語）による個別の教育相談を中心に、日本語指導にも当たっている。

４　平成１４年度の具体的な取り組み内容とその成果等について

①　研究主題

ア　足利市の実践研究主題

「日本語指導が必要な外国人児童生徒への指導の在り方」

主に日本語指導が必要な外国人児童生徒を実践研究の中心に据え、外国人児童生徒に対応した適応指導、教育相談、日本語指導、特色あるカリキュラムや個に応じたきめ細かな教育課程・指導方法の実践的研究を行う。

イ　センター校の実践研究主題

「外国人児童一人ひとりの実態に即した日本語の基礎・基本を育てる指導の研究」

主題の趣旨

外国人児童たちが、日本の学校に入った機会を生かし、有意義な学校生活を送るためには、学習や生活に困らないような日本語能力を出来るだけ早く身につけることが必要である。そこで、個の実態に合った指導法や教材の開発で日本語の基礎・基本を育てる指導力を伸ばしたいと考えた。

②　研究主題に関連した活動

ア　足利市の活動

足利市事業の外国人児童生徒教育専門指導員も含め、日本語指導講師、カウンセラーの３人で１６校へ巡回訪問指導を実施している。

また、県指定の外国人児童生徒教育拠点校（小学校４校、中学校３校）では、それぞれ１名の加配教員が日本語指導担当となって、個別またはＴＴで指導に当たっている。

イ　センター校の活動（山辺小学校）

日本語教室では、日本語指導・生活適応指導・学習適応指導などを中心に研究実践を行ってきた。指導の形態としては、日本語教室への取り出し指導と在籍学級への入り込み指導である。

③　帰国・外国人児童生徒とその他の児童生徒の相互啓発の観点による取組及びその成果

ア　センター校での実践

国際理解教育指導計画の具体目標の中に「・日本文化と異国文化の違いや共通点などに気づく。・世界の人々の文化、伝統を尊重しようとする気持ちを持つ。」という項目がある。外国人児童の在籍する学級や学年では外国人児童がいるからこそ出来る取り組みや活動を積極的に取り入れるようになった。

イ　足利市立教育研究所委嘱研究員による実践（富田小学校）

富田小学校の職員を研究員として委嘱して、平成１３・１４年度の２年間に渡り「小学校英語活動」の実践について研究をした。このことについて、学校全体で英語活動の実践的研究に取り組み、大きな成果を上げた。

なお、富田小学校の実践に関するＨＰアドレスは、http://www.watv.ne.jp/~tomitaps/

ウ　国際化教材開発専門部の取組

足利市内の小中学校の国際理解教育及び英語教育への取組について紹介し、教材開発と指導法の改善、及びその普及に当たっている。

足利市立教育研究所ホームページに紹介されている。ホームページアドレスは、

http://www.city.ashikaga.tochigi.jp/kyouiku/kyouzai/kokusai/new/kore.htm

④　その他特筆すべき平成１４年度の成果

ア　足利市の成果

・　足利市事業による専門指導員を含め、本事業による日本語指導講師、カウンセラーの巡回訪問指導により、適切な日本語活用力の向上及び教科の学習内容の理解が促された。

・　それぞれの学校の進路指導の充実にも寄るが、日本語指導講師やカウンセラーが高校受験についての相談に乗ったり、補充指導を行ったりしたことにより、県立高等学校に推薦で入学できた外国人生徒もいる。

・　孤立気味だった外国人児童（小学校１年生）も、母語によるカウンセリングにより心を開き、学習にも意欲的に取り組めるようになった。また、不登校気味だった外国人児童も、指導員の訪問日には喜んで登校するようになった。

・　総合的な学習の時間を利用して国際理解教育を推進する学校や英語活動を取り入れる学校が見られ、学校区や足利市内に在住する外国人に依頼して、外国の文化や生活習慣等について学ぶ機会が多くなっている。

イ　センター校の成果と課題

日本語教室での指導は、最終的には指導の必要がなくなることを目指して行っている。つまり、学校生活に適応し該当学年の授業内容を理解することを目指しているが、そのためには画一的な指導でなく一人ひとりの実態にあったきめ細かい指導が必要であり、それを行うことで一人ひとりの日本語の力をより伸ばせることが分かった。

また、今年度の実践を通して、これから取り組まなければならない課題もいくつか明らかにすることが出来た。

・　外国人の児童が日常生活の言葉は使えるようになっても、学習の中で使われる熟語の意味が不十分な場合がある。そのため、質問や評価のテストなど易しい言葉で言い換えたり説明する必要がある。

・　文字の習得につまずいたり、時間がかかる。漢字だけでなく、平仮名や片仮名を書くときに、思いもよらないような筆順で書いてしまうことが見られるので負担にならない程度に正しい筆順を指導する必要がある。

・　友達同士との会話力は、３～４か月もすると身に付けてしまうが、主語・述語、てにをは、カタカナ言葉、拗音・促音等を正しく使った文章を書けるようになるまでは、根気強く指導する必要がある。

・　外国人児童が日本語を身に付けていっても、その保護者の日本語習得がなかなか進まず、学校から配布される様々な連絡等を工夫する必要がある。